リーディングDXスクール事業 【実践事例】

愛知県立東海樟風高等学校（愛知県）【指定校】

＜教育利用＞②部活動での活用（コンピュータ部） 課題解決学習で使用

コンピュータ部 課題解決学習で使用 部員数：１年３０人、２年２０人、３年１０人, 計６０人

これまで情報処理の大会や資格取得が主な活動であったが、今年度より「課題解決学習」「e-スポーツ」「動画編集」に取り組んだ。また、さまざまなコンテストに参加した。

取り組んだコンテスト等 「やまがたAI部」「パソコン甲子園」「シンギュラリティクエスト」「AIアートグランプリ」「ChatGPT×ロボットアイデアコンテスト」

ChatGPT有料版のアカウントを本事業とは別の予算で取得
教員６名 生徒３名（コンピュータ部生徒各学年に１つずつ）に使用してもらい活用方法を聞いた。

「やまがたAI部」

山形県が主催するAIプログラミング教育を通じた『デジタル人材育成プロジェクト』に参加。AI甲子園で課題解決学習を行う。伴走企業にトレーナーとしてアドバイスをもらっている。

ガードマン東海を提案
自転車事故防止AI。画像等をAIに認識させ危険箇所でブザーを鳴らして注意喚起をさせる。
GPSも活用。スマホアプリ化し、エッジで動かすことを目標にする。
自転車に装着するケースを３Dプリンタで作成。

生成AIの活用は
テーマ検討、課題の洗い出し、AIの構築アドバイス、海外論文翻訳・要約、画像生成など幅広い。
要するに、どんなことにも使用している。そのため活用紹介ができないほど膨大である。
ChatGPT4、Gemini(Bard)、MicrosoftCopilot(BingChat)
にも精通し、案件によって使い分けをしている。

生徒は「生成ＡＩを使って何かしよう」ではなく、スマホを触るように当たり前に使いこなしている。活用頻度や応用力は教員以上であり、凄まじい。

リーディングDXスクール事業 【実践事例】

愛知県立東海樟風高等学校（愛知県）【指定校】

＜教育利用＞②部活動での活用（コンピュータ部）　課題解決学習で使用

生徒感想等

##やったこと

・英字論文を翻訳し、文中の疑問点を質問したり、自身の認識が正しいか確認する。英文を読み、分からなかった文の文法や熟語の意味まで解説させる。
・初めて触れることに取り組む際に、取り得る選択肢を列挙させる。みんなが「何でもいい」と思っていることを、自分たちを演じさせ、議論させることでとりあえずの結論を出す。自分たちの会話の癖を覚えさせても面白そう。
・「確認する」と「確認をする」、「初速が速まる」など微妙な違いからくるそれぞれのニュアンスを聞く。

##感想

・生成AIを活用した一番のメリットとしては、作業の初速が上がったことだ。初めてのことを行う際にはまず、情報収集をする必要がある。本来であれば複数のソースを見比べ、概要を掴む必要があるが、ChatGPTを使うと複数のソースを把握した上で解説してくれ、もう少しだけ詳しく知りたいときには対話をすることもできるため、初期の情報収集には適している。だが、ファクトチェックをするためには自身が正しく理解をする必要があるため、最終的には自身の目で1次情報を確認しなければならないと感じている。

生成AI活用事例まとめ